

13. 狭い門からは入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多いのです。

14. いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。

説教

これは、イエスさまが山上の説教の締め括りとして語られた三つの話のうち最初のものです。イエスさまは山上の説教の締め括りとして三つのたとえを話します。最初は、狭い門と広い門のたとえです。二つ目は、良い実を結ぶ木と悪い実を結ぶ木のたとえです。三つ目は、岩の上に家を建てた人と砂の上に家を建てた人のたとえです。これら三つのたとえは、要するにこれまでイエスさまが話した内容を実際に行うかどうかを聴衆に迫るものです。

最初のたとえでは、イエスさまの教えを実践する道を「狭い門」と「狭い道」にたとえます。二番目のたとえでは、これまでのイエスさまの教えを実践すると「良い実を結ぶ」と解説します。そして、三番目のたとえでは、イエスさまの教えを実践する人は「堅固な岩の上に家を建てた人」で、あらゆる試みに耐えて永遠に立ち続けると保証します。

このように、イエスさまはただ語りっぱなしになさる方ではありません。イエスさまの説教は神のことばそのものです。一度語られたら最後、聞く者にそれを実践することを迫ります。そうして、聞いてその通り行く者は、いのちに至り、良い実を結び、最後の審判にも耐えて永遠に立ち続けるのです。

イエスさまは「狭い門から入りなさい」と言われます。なぜなら、「滅びに至る門は大きく、その道は広いからです」。直訳は「滅びへと連れて行く（引いて行く）門は大きく開かれ、道は広々としている」です。しかも「そこから入って行く者が多い」と言われます。どこからでも入れるような極めて大きな門が広く開かれています。いかにも、さあ誰でも来なさい、大いに大歓迎とばかりに門戸が広〜く開かれています。しかもそこから入って行くと、これまた実に広々とした道が気持ちよくどこまでも続いています。居心地満点です。とても快適に歩いて行けます。それで当然のこと、誰でも彼でもホイホイとそこからゾロゾロ入って行きます。「そこから入って行く者は多い」のです。

しかし、イエスさまは「狭い門から入りなさい」と言われます。「広い門」「大きな門」ではなく、「狭い門から入りなさい」と言われるのです。どうしてでしょうか。「滅びに至る門は大きく、その道は広いからです」。どんなに簡単に入ることができても、あるいは、どんなに居心地が良くても、その道は「滅びに至る道」です。万人に開かれた大きく広々としたその道は、最後は「滅び」に至ります。どんなに熱心に突き進んでも、たとえその道を極めたとしても、その道は結局は「滅び」にしか到達しません。その道は「滅びへと連れて行きます」。「滅びへと引いて行きます」。まるでベルトコンベアーの上で自動的に運ばれていくように、楽しく、快適に、時を忘れてルンルン歩いているうちに、気がついたらいっしょに終着点の「滅び」に到着しているのです。だからこそ、「広い門」ではなく「狭い門から入りなさい」とイエスさまは言われます。

「狭い門」は文字通り「狭い」のです。しかも「その道は狭い」ので、したがって「それを見出す者はまれです」。この道には二つの困難があります。一つは「門」が「狭い」ことです。だから、当然見つけにくいのです。二つ目の困難さは、その狭い門からくぐるようにして中に入れたとしても、そこから先の「道が狭い」ということです。

道の狭さを表現する「狭い θλίβω」は「狭い門」の「狭い στενός」とは別の言葉が使われていて、「圧迫される、混み合っている、苦勞する、苦難に遭う、困る」といった意味があります。

つまり、イエスさまがこの道を行きなさいと勧める道は、まずその入り口があまりに狭いために見つけるのも困難なほどのものであり、同時に、そこをどうにか見つけて中に入ることができたとしても、その先はあまりに狭くて圧迫感があり、一步一步歩くたびに、壁なのか人なのかわかりませんがあちこちゴツゴツとぶつかり、苦勞し、苦悩し、悩み、苦しむのです。しかも、その道は、最初だけ狭いのを我慢しながらどうにか進んでいけばそのうち少しずつ道が広がって楽に快適に歩いて行けるようになるといったようなものではありません。その道はあくまで「狭い」のであって、最後まで、終点まで、辿り着く所まで、つまり死ぬまでずっと「狭い」のです。ゴツゴツと右から左から圧迫されます。苦勞続きなのです。

でも、それなのに、イエスさまはどうして「狭い門から入りなさい」と言われるのでしょうか。それは、その道が「いのちに至る」からです。「狭い門」から入って「狭い道」を行くその道だけが「いのちに至る」のです。その人生は、悩み多く、苦勞が多く、苦しみに満ちているのですが、それでもその人生を全うしたら、その苦しい人生の先には「いのち」が待っています。すなわち、それは「永遠のいのち」という終着点です。つまり天国に行けるのです。どんなに悩み多き人生であったとしても、その終わりには天国へと辿り着くことのできる人生は、どんなに幸いなことでしょうか。

とは言え、イエスさまはこの小さく「狭い門」を「見出す者はまれ」だと言われます。「まれ」という言葉は「ごく少数」の意味で、いるにはいるが殆どいない、あるいは殆どいないけれどもいることはいる、ということです。東京、北区、赤羽に於いて、膨大な数の建物の中からキリスト教会を見つけてその門をくぐる者はほとんどいません。いるにはいるけれども、見ての通り極めて少人数です。この世に於ける仕事や家族・友人付き合いなど用事が様々たくさんある中で、日曜日このように教会に集まることは特別なことです。当たり前のことでも普通のことでもなく、特別なことです。まさに神に特別に選ばれた者だけに可能なことであると言えるでしょう。

確かに、毎主日教会に来るということ一つ取ってもそれが「狭い門」「狭い道」であることは間違いない事実ですが、冒頭で説明した通り、ここでイエスさまが直接的に言われる「狭い門」「狭い道」とは、これまでイエスさまが語ってこられた山上の説教の具体的な内容を指しています。それは、キリスト者の真の「幸い」とは何かから始まりました。真に幸いな者とは、心貧しく、悲しみ、柔和で、義に飢え渴き、憐れみ深く、心清く、平和をつくり、義のために迫害されている者のことで、これだけでも十分に「狭き門」「狭き道」です。心貧しく、義に飢え渴き、心きよく、神を仰いで、みこころを知り、そうして柔和にあらゆる苦難に耐えて「世の光・地の塩」となってみこころを行う、その結果、迫害されて悲しみますが、義を行って迫害されながらこの罪の世に平和を築いていきます。それは本当に「狭き門」「狭き道」です。

そして、イエスさまは、天国は人の義すなわちパリサイ人の義にまさる義を持つ者だけが行けることを明らかになさいます。それは神の義、すなわちキリストの義のことですが、キリストの義をいただいて、人は天国に行くことができるのです。この広い世界で、しかも長い人類の歴史に於いて、キリストただおひとりが救い主であり、キリスト以外に救いなしというのですから、考えてみればこれは最も「狭き門」です。この門を見出す者は極めてごく「まれ」です。特別に神に選ばれた者です。

次に、イエスさまは、この「狭き門」を見出してくぐった者が、どのように救いのゴールを目指して歩むべきかを教えます。それは、「殺してはならない」「姦淫してはならない」「嘘をついてはならない」という、神と人を愛するよう教える十戒に要約されます。神に召された者は、神の愛に答えて、神と人を愛します。これもまた「狭き道」です。それは別の表現で言えば、要するに、イエスさまに従い行く道です。地上に宝を積まず、心を天に向

けて、神の国とその義を求めて歩むのです。明日のことを何も思い煩わず、何がイエスさまに喜ばれることであるかだけを来る日も来る日もひたすら探求しながら、イエスさまに従っていきます。これはどんなに「狭き道」でしょうか。世界にただ一つしか無い、最も「細き道」です。それは、苦勞の絶えない、悩みと苦しみに満ちた「狭き道」です。最初は大変だけど徐々に楽になるという道ではなく、いつまでも、最後まで、一生苦勞する、十字架の道です。

でも、イエスさまはこの「狭い門」をくぐって「狭い道」を行けと言われます。どうしてでしょうか。この道は「いのちに至る」からです。この道は、苦勞して、苦勞して、一生苦勞するけれども、最後には「いのち」が待っています。全うしたら、天国に行けるのです。そして、これ以外に天国への道はありません。イエスさまを信じてイエスさまに従うというこの道一本だけが天国への唯一の道なのです。世の多くの人、目の前に待ち構える「広い門」から入って、気持ち良く広々とした「広い道」をルンルン歩んで永遠の「滅び」に至ります。

でも、イエスさまは、「多数」に惑わされることなく、少数の道を行くよう教えます。「多くの者」が行くからといって、その道を行ってはならない、数に惑わされるな、その先に何かあるのかをよく考えろ、多数ではなく少数の道、メジャーな道ではなくマイナーな道を行け、それがいのちの道だと言われます。それは、イエスさまが歩まれたその後に従っていく道です。たとえどんなに苦勞が多くても、イエスさまは、私たちが「狭い門」をくぐり、「狭い道」を歩んで、「いのち」に至るよう願っておられるのです。